

101.アルコール過敏

From MY point of view

- アルコールによるアレルギー反応はまれではあるが、即時型・遅延型接触性皮膚炎を来す。
- アルコール過敏があるときには、すべての医療行為時にはアルコール製剤を排除する。
- 「アルコール消毒で皮膚が赤くなる」＝「アルコール過敏」ではない。
- 「アルコール過敏」の際にはアルコール飲料を飲んだときの症状の発現や、アルコール綿で皮膚消毒したときの発赤以外の症状の有無を確認する。
- アルコールアレルギーの際にはグルコン酸クロロヘキシジン水などを使用した皮膚消毒を行う。

出典 1)「アナフィラキシーショック 最善の予防・診断・治療 ～すべての医療者・教職員に向けて～」、2)「麻酔科ト
ラブルシューティング A to Z」

【アルコールの接触皮膚炎】

1. 機械的(化学的)刺激
2. 非免疫学的機序(非アレルギー性)
アルコール不耐症にみられる
3. 免疫学的機序(アレルギー性): **アルコール禁忌**
即時型・遅延型
経口摂取時の即時型アレルギー反応を示すことが多い

- アルコール綿で皮膚を拭いたときに赤くなる状態のみでは「アルコール過敏」かどうかは判断できない。刺激性接触皮膚炎とアレルギー性接触皮膚炎を鑑別しなければならない。
- 刺激性接触皮膚炎の原因は多くあり、アルコールそのものによる化学的作用、アルコール製剤に含まれているアセトアルデヒドや芳香性材料、添付色素などが考えられている。
- アレルギー性接触皮膚炎には即時型反応と遅延型反応が報告されている。
- 即時型アレルギー性接触皮膚炎では、アルコール接触後 4 時間で皮膚症状が出現し、10 時間にわたりその皮膚症状が強まり、24 時間でゆっくりと消退する症例の報告がある。
- 遅延型アレルギー性接触皮膚炎では、消毒部位に 2-3 日後から掻痒性発疹、濾胞状丘疹、蕁麻疹などが出現し、時には消毒部位より広範囲に皮膚症状が発現することがある。
- アルコールでアレルギー性接触皮膚炎を示す患者の多くは、アルコール飲料を飲んだ時には、全身性の紅斑や蕁麻疹、頻脈などが見られることが多い。
- アルコールによる非免疫学的接触皮膚炎の機序として、東洋人に多く見られるアセトアルデヒド脱水素酵素の活性が低いアルコール不耐症の人に見られる反応がある。この反応は免疫学的アルコールアレルギーと分けて考えなければならない。
- 「アルコール過敏」の訴えがある際には、アルコール飲料を飲んだときの症状の発現や、皮膚消毒時の症状の有無を確認する。発赤のみならず、発疹、蕁麻疹などがあるときはアレルギー性接触皮膚炎の可能性がある。アルコール飲料の摂取で全身的な蕁麻疹などの発症があれば、アルコールアレルギーの可能性が高い。
- アルコールに含まれるアレルゲンは、エタノールそのものや不純物、アセトアルデヒドなどが考えられている。